

## 三重大学人文学部外部評価

松田 純（静岡大学人文学部）

はじめに、学生教育、キャリア形成支援、学生生活支援、地域連携活動などに学部をあげて真剣に取り組み、着実な成果を挙げている。多くの点で貴重な成果があるが、主な特記事項として次のようなものがある。

- ・ 共通教育では、とくに、英語の実践力を鍛える教育において、具体的な目標を掲げて、それを達成するとともに、学生の勉学意欲および出席率も向上している。
- ・ 専門教育では、「階層型カリキュラム」において学年階梯の教育目標を明確にし、学生の関心を引き出しながら、卒業研究テーマの選定へ導いていくシステムを確立して、体系的教育の実践に取り組んでいる。
- ・ キャリア形成・就職支援では、ガイドブックや手引きの作成、支援セミナーの開催など、きめ細かい支援指導に積極的に取り組み、全国的に見ても模範となるような活動を展開し、大きな成果を挙げている。
- ・ 教育環境整備・学生生活支援では、学部の予算を特別に投入して、IT 講義室を整備し、学生がゼミのレポートを共同で作成したり自習するための IT 対応の共用スペースを新たに整備するなど、学生の要望に応えながら、教育成果に直結する施策を行っている。
- ・ 研究および地域連携活動では、地域のニーズに応えるさまざまな実践的なテーマで研究を展開している。それらが地域との共同研究の展開や外部資金の獲得につながり、また公開講座開催など地域連携活動へと発展している。
- ・ 人事管理、女性教員の雇用、実務経験者の採用、特任教員の活用など人事政策でも工夫がみられ、成果をあげている。

以上の取り組みの努力と成果は高く評価できる。

以下、今後さらに改善すべき点を挙げる。

- ・ 教員組織と教育組織とを別に管理していることについて  
法人化後、人員が削減されていく傾向にあるなかで、この管理方式にはメリットがあると思われる。しかしながら、こうした方式をとった他大学の事例ですでに指摘されているとおり、分野を異にする教員が教育組織にどう責任をとるかという問題がある。地域研究（Area Studies）スタイルは、伝統的な学科別編成を超える、問題対応型の新しい学際的な研究教育スタイルであり、これの実をあげるためには、教員相互の相当な努力を要する。「学際的」という言葉が使われてからすでに久し

く、先進例は数多くあるにしても、全体として見れば、わが国の研究者の多くはまだこのスタイルに慣れていない。日本、アジア、ヨーロッパ、アメリカ等の地域に関わる諸課題を人文社会諸科学の総力をあげて研究教育するという体制を組織の基本としているならば、成果の実をあげるために、教育組織に属する教員相互の共同研究などを日常的に活性化させ、科学研究費などに共同で応募する取り組みをいっそう強化し、そうした教員相互の交流と共同研究の成果が教育活動に反映するようなスタイルの構築が必要であろう。教育コースが地域で区分されているが、文学、歴史、言語などのそれぞれの専門分野の一指導教員のもとで卒業研究をまとめるというのではなく、少なくとも異なる複数の分野の教員が共同で指導にあたるような制度設計を検討してもよい。

- **FD** 活動で教員相互の授業参観という方針を出しているが、実行は今後の課題となっている。一般的な呼びかけではなく、授業参観月間などを設定し、参観結果と感想を出し合い、相互に学びあうという雰囲気を醸成していくことが求められる。上記の教育組織に属する教員相互の交流と結びつけた実施も考えられるのではないだろうか。
- キャリア形成・就職・学生生活支援では、非常に努力されており、それらに敬意を表したい。しかしこれは全学共通の課題でもあり、全学共通の取り組みとしていい部分がかかなりあると思われる。全学的な体制を構築し、学部独自に取り組む課題を絞っていくことも持続可能性を担保する上で必要であろう。